

年の始めといふと、物を始めるにも都合がよい  
と思つて明治三十七年の始めに於て、此事を喫煙  
される方々にあすゝめするのである。

初春

雨　　峰

(一)

うれしき春の來りたる

今日のよろこびかぎりなし

軒端にうたふ鶯の

聲もたのしくさこゆるは

いくちよろづの大御世を

ことばく淨き音色かや

(二)

いぶせき賤の伏屋にも

ちさき旭の御旗さえ

ふと、とあねの顔色に

てりさすかげもうつくしく

富士のねは空たかく

白妙の色えめるなり

(三)

門の小川の流さえ

ふしおもしろく歌ふなり

こゝにも春の光あり

新まりたるわが家は

いかに尊き姿ぞや

このしづまりし小村里

(四)

きたれわが友今日の日に

たのしく富士のねのもとに

河の流れのきよきこゝ

群きて遊べわか友よ

男女のけじめなく

うれしく遊べ今日の日を

黒澤登幾子傳補遺(つゞき)

下村三四吉

○登幾子が京都に送られし後、牢屋敷役所の白洲にて糺問を受けたるときの次第につきては、

……頃は卯月の十四日、始めて京都御白洲へ召出さる、尤も牢屋敷の御役所なり。白砂の上荒蕪をしさたる上に引居らる。彼の座に平伏す。顔を上げよと聲の下、ハツト答へて顔上ぐれば御役所に並居たる御方々七八人、吟味方と見えけるは手島敬之介殿、年のころは三十路と覺し

き當りまでの黒羽二重に、紋付上下の着こなしぶり、さすが吟味の役方と撰び出たる吟味の達者、いたわり役と見えけるは加納繁三郎殿、年の比五十路とおぼしき、同じ装束、寛仁大度のりつばのこつがら、實に博學とぞ見へにける、開役には鹽津庄藏殿、年のころ四十路わまり、同じ装束、りつばのこつがら、役所の眞中に坐してもくねんとして物いはず。其外同心の面々には、大河南重藏、平塚兵次郎、上田直之丞殿其外姓名を覚えざる方々三人づ、筆を取て申述ぶる言を記されける。手島氏の曰く、其方婦人の身として一人にては參るまじ、つれの者は何くにゐる、有体に申されよ、其方は先達て烏丸扇屋庄七方に宿りて北野の社へ詣で、之れより慶園坊へ相尋ね、東坊城家へ歌學入門の願を致